

Title	破壊的イノベーションの促進要因研究-イノベーターとしてのトップマネジメントの役割に関する考察-
Sub Title	
Author	姜, 南宇(Kan, Namuu) 浅川, 和宏
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2009
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2009年度経営学 第2416号 可能
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002009-2416

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文要旨

所属ゼミ	浅川	研究会	学籍番号	80830332	氏名	姜 南宇
(論文題名)						
<h3>破壊的イノベーションの促進要因研究</h3> <p>－イノベーターとしてのトップマネジメントの役割に関する考察－</p>						
(内容の要旨)						
<p>現在日本の製造業が置かれている外部環境は、グローバル化と IT の急速な進展を背景に、ゲームのルールが大きく変化している、また、世界市場の一体化が進む中で、世界的規模での産業大再編が進展している。更に、全ての産業において技術発達による産業生産性が向上された。ところが、日本は欧米に比べて、産業競争力が低下し、昨今に至っては収益性の低迷に悩まされているのが現状だと考える。</p> <p>そこで、私は、ホンダやソニー、キャノンなどが引き起こした過去の破壊的イノベーションが再び旺盛に再現されることを期待しながら、何らかの示唆を与えられる研究を目指し、破壊的イノベーションの促進要因を研究の対象とした。その中でも特にイノベーターとしてのトップマネジメントの役割がいかに破壊的イノベーションの促進に影響を及ぼし、成功へのマネジメントを行うかに焦点を絞った。</p> <p>研究の方法論としては、帰納法によるデータ・資料分析、ケーススタディを主体としながら、アンケート調査・統計分析を通じて探索型の分析を加えた。</p> <p>ケーススタディは任天堂とアップル、2社の事例研究を行い、破壊的イノベーションを成功させた両社の成功要因におけるトップマネジメントのいくつかのパターンが見つかった。一つは、顧客が求める付加価値とリンクした明確な戦略的意図を持ち、それを組織に根強く落とし込んだこと。二つ目は、戦略的意図の実行プロセスにおいて、意図的戦略と創発的戦略とをバランスよくマネジメントできること。三つ目は、社員の創造性を引き出せる組織文化を造成すること。以上の三つのパターンが破壊的イノベーションを促進するにあたり、イノベーターとしてトップマネジメントの重要な役割だというのが分かった。</p>						